

江戸期 石川県で財を成した船主

「西谷家と小樽」明らかに

樽商大・高野氏 「北前船」呼称発見も

江戸時代に創業し石川県を拠点に財を成した北前船主の西谷家と小樽の関わりを研究している小樽商科大の高野宏康客員研究員が、成果を論文「小樽に進出した北前船主・西谷家」にまとめ、発表した。同県加賀市の西谷家の邸宅に残る1万点の資料を調べ、小樽進出の経緯も明らかにした。

（西依一憲）

小樽市と加賀市は「北前船寄海地・船主集落」として日本遺産に認定されている。調査は2017年11月～今年3月に同大と加賀市、北海道北前船調査会などが共同で実施。北前船主集落があった加賀市橋立の西谷邸に残る資料を調べた。

3月に発表した論文は、西谷家中興の祖の5代目庄八が1889年（明治22年）5代目西谷庄八（前中央）が北前船主らと小樽で写した写真（1886年12月撮影）



小樽に小樽に支店を開いて後に本拠を移し、現在は観光案内所としても使われる旧小樽倉庫を94年に完成させた5代目庄八は小樽で金融機能を持つ営業倉庫業や船舶代理業など新たな業態に手を広げ、商都小樽の基礎を作ったという。

新たに確認された資料のうち小樽進出の経緯は5代目庄八が1917年（大正6年）に小樽商業会議所（現商工会議所）に出した履歴書などで分かる。履歴書には当時、明治政府が札幌を拠点に北海道開拓に力を入れていた事情を踏まえ、「世人は函館々々と思っていたが、私は決然小樽に店舗を置くことにした」とある。

江戸中期から明治期にかけて盛んとなった北前船だが、当時、船主自身が北前船という言葉を使っていたかはよく分かっていなかった。今回見つかった20年（大正9年）の西谷家の会社案内や27年（昭和2年）の社史に「北前船」の記述があったほか、5代目が33年に死去した際の海運業者の手

辞で「北前船にて北海道に渡られ」と言及していたと判明。高野研究員は「船主自身が海運業を『北前船』と認識していたことを示す貴重な記録」と話。

論文は同大開設のホームページ「小樽商科大学術成果コレクション」(https://barrel.repo.nii.ac.jp/)で閲覧可能。